なんこく探けん隊

写真の彫刻物、「自然堂」と読む。才谷龍馬公園のあづまやに掲かっている彫りものですが、「然」の字が倒れているのは、意図されたものか、そうでないのか、何とも興味を引かれます。

自然堂とは、あの有名な才谷梅太郎こと、坂本龍馬が、慶応３年２月（慶応４年は明治元年）、下ノ関の阿弥陀寺にかまえた新居のこと。この頃から変名、才谷梅太郎を名のっています。

ゆかりの公園整備が始まって２年目になりますが、彫りものは市内で彫刻業を営む龍馬ファンが、あづまやの落成日の前日、地元の有志から依頼を受けて、急きょ作成し寄贈したもの。

オートキャンプも可能な小公園に、手づくりのステージもあり、今年は遊歩道の整備などが計画されているようで、遊び心がいっぱい。

全国の龍馬ファンのメッカとして整備され、たくさんの人に愛される施設になってほしい……昨年植樹された「梅の幼木」の成長も順調……。

元気・やる気・本気のまちづくり

土佐の南国ルネサンス構想 ⑥

基本構想は『人づくり』と『まちづくり』を二本の柱にして、その方向性として八つのチャレンジを試みていくことにしています。

その考え方を順次お知らせしていきます。

人が輝き まちが煌（きら）めく

▼――まちづくりのキーワードを『人が元気・心が元気・そして、まちが元気』な健康文化都市・南国にしていましたが変わりましたか。

そうなんです。三つの元気で『元気都市・南国』を構想していましたが、お隣りの高知市のキャッチフレーズに使われてしまって……（笑い）

「元気の出るまちづくりを変更して『人が輝き・まちが煌（きらめ）く』まちづくりにしました。

▼――人づくりや文化・スポーツ・保健・福祉などソフト事業を中心に、人がキラリ輝くまちづくり。都市や産業、生活基盤の整備などハード事業を中心に、まちがキラリ煌（きらめ）くまちづくりに大別したわけですね。

人がキラリ輝くまちづくりとは――。

まちづくりは人づくりであり、主役となることのできる人を育てることが本来のまちづくりです。すべての市民が郷土南国市を愛し、誇りと自信をもってまちづくりを進めるエネルギーにしていくことが「いい人の住んでいるまち・南国市」を全国に情報発信することになるという考え方ですね。

そこで、地球の真ん中・南国市の顔づくりやキラリ輝くまにろっぱひとづくりを目標にしていきます。

また市民の価値観は「もの」の豊かさから「こころ」の豊かさが実感できる地域社会を求めています。人と人、人と自然、人と社会の交流を大切にしながら、心身ともにすこぶる健康で「うるおいとやすらぎ」「やさしさとふれあい」のある健康文化都市づくりを進めていきます。

そのために、生きがいと安らぎの福祉のまちづくり、芸術・文化の創造とスポーツのまちづくりを目指していこうとしています。

若者定住の基礎体力づくり

▼――いま一つの柱が『まちが煌めくまちづくり』ですね。

都市には人が住み、働き、学び、遊ぶという多様な機能が求められています。

陸・海・空の恵まれたゴールデン・トライアングルにある南国市の潜在的な可能性を最大限に生かして二〇〇三年（平成十五年）の南国市の自立をかけて『基礎体力・基盤整備』を進めていこうというわけです。

ワールド・フラッグ・サン・フェスティバル

南国市も国際色豊かになってきました。どの国に行っても一様に評価されるのがフラッグ（旗・のぼり・フラフなど）です。

岡豊山へ１万本くらい掲揚する。高速道路のインターを下りた県外客も「アッ」と驚く旗の群れ。そこには世界中の友好旗も掲揚され、“平和のための旗まつり”が開催される。人は健康に、世界は平和に、新たな時代建設に燃える初夏（ゴールデン・ウィーク）のイベント、ワールド・フラッグ・サン・フェスティバルはどうでしょう。

（匿名希望）

アイディアポストより

●いま部落は、そして……。

同和教育シリーズ

市民・県民の意識は？⑧

南国市の教育委員会が、二回にわたって実施した、同和問題に対する市民の意識調査の一部を、数か月にわたって連載してきました。

調査結果では、同和地区の人との結婚に反対する市民や、同和対策事業等に対する理解が不十分な市民が、かなり多いことが明らかになりました。

特に、同和地区の住宅や環境が改善され地区外との格差がなくなると、これをねたむ意識が生まれ、ねたみ差別という現象が一部に見られるようになりました。これが同和問題の解決を遅らせる大きな要因のひとつになっています。

一九八九（平成元）年に、高知県同和対策審議会は、「同和問題早期解決のための今後の課題とその対策」について、高知県知事に答申書を出しました。

その中で、

▼産業の振興と、雇用と失業の改善安定。

▼教育の充実および啓発活動を今後における最も重要な課題としてとりあげています。

私達の住んでいる日本社会には、社会意識とよばれている共通の感情や意識が存在しています。部落差別の意識もこの中に含まれており、国民の一部に定着していることも事実です。特に部落問題については、世の人の多くが、ずいぶん誤った知識をもっていたり、根拠のない偏見をもっています。これを変革するには、部落差別に対する正しい知識を学び、自らの意識や行動を考え直す機会が必要ではないでしょうか。

国や県や市では、学校教育・社会教育両面での同和教育には、ずいぶん力を入れています。高知県や南国市では成人に対する各種学級や講座で同和教育を推進していますが、その中で、『同和教育推進講座』を特設してより深く、より正しい理解と認識を持とうと真剣な学習を積み重ねています。

その講座の内容は、

《第一講座》

部落は、いつ、だれが、何のためにつくったか。

《第二講座》

部落差別は、明治以後なぜ残されたのか。

《第三講座》

部落差別の実態が、現在どのように残っているか。

《第四講座》

同和問題解決のため、運動、行政、教育がどのように行なわれているか。

《第五講座》

同和問題は私達の生活と、どのようなかかわり合いがあるか。

《第六講座》

自分自身が同和問題解決のため、どのように実践、行動、生活をしていくべきか。

となっています。

そして、『だれもが住みたい、働きたい、行ってみたい、参加したいと願うまち』を自立した市民と行政が一緒になって進めようとしています。

▼――遅れている産業、生活基盤など基礎的な基盤整備をレベルアップすることによって、若者の県外への流出を阻止しようというわけですね。

そうです。そのためにまず、子や孫の時代への基礎体力づくり、交通・情報通信のネットワークづくりを進めます。

また、快適な生活環境・居住環境の整備として、人にやさしい快適環境づくり、働く場の確保など産業基盤の整備として、働くよろこびに輝く産業づくりを目指していこうとしています。

▼――今までの総合計画と違ってソフト事業に力点を置いていますね。

そうなんです。今までは、どちらかというとハード事業としての建設事業が中心でしたが『人づくり』をまちづくりの柱の一つにしてルネサンスしていこうという考え方です。

これからの南国市を担っていく若者の人材育成、高齢化社会の生涯学習、文化・スポーツの振興などですね。また『広つくって魂入れず』という傾向があって、箱ものは見事に落成したが、利用者がさっぱりという事例が全国的な反省材料になっています。ハード（建物）とソフト（活用）を並行して効果的な活用をはかっていこうというねらいもあるわけです。

次回から、八つのチャレンジを紹介していきます。